
第 116 回関西スペイン語教授法ワークショップ(TADESKA) 開催の報告

CXVI Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai

日時:2018 年 4 月 7 日(土)10:30 - 12:30

場所:関西学院大学梅田キャンパス(ハブスクエア) 1401 教室

担当者:小川雅美

2018 年度のテーマ「教授法(おしえかた)~新しい挑戦~」

ワークショップのタイトル「外国語教授法と第 2 言語習得一研究の歴史」

* Fecha y hora: sábado, 7 de abril de 2018, de 10:30 a 12:30

* Lugar: Universidad Kwansei Gakuin, Campus de Umeda "K.G. Hub Square", Aula 1401

* A cargo de Masami Ogawa

* Tema del año académico 2018: "Metodología: nuevos desafíos"

Título del taller: "Metodología de enseñanza de lenguas extranjeras y adquisición de segundas lenguas: historia de investigación"

テーマについて

「(外国語を) 教える」という行為は他のあらゆる行為と同様、その仕方(「おしえかた」)を伴うものであり、非常に古い歴史を持つ。一方、「外国語教授法研究」が本格化したのは 20 世紀半ば以降である。近年のグローバリゼーション、スマホや自動翻訳など ICT (情報通信技術) の劇的な進歩の中で、どう教えるかという問題について、今年度一緒に考えていきたいと思います。今回は、その第 1 回として、自分たちがかつて学生として、そして今教師として使用した(している)教科書を持ち寄って「おしえかた」について考察する入り口とし、これらの教科書が作られ・使われた(使われている)時代と「外国語教授法研究」および「第 2 言語習得研究」の歴史を概観しました。

参加人数

11 名

実施内容

概ね次の通りです。

1. 参加者が持参した教科書(自分が初めてスペイン語を学校で習った時に使用した教

科書と今自分が授業で使っている教科書) についての情報交換。次のようなことがわかった。

★参加者の出身大学が少数に限定されていたためもあるが、1970年代から2000年代まで、初級文法の教科書として宮城昇『新基本スペイン文法 (Curso elemental de gramática española)』(白水社刊。初版1971)が使用されていたことがわかった。(他の教科書と同書が文法教科書として併用されていた。)

★参加者のうち院生(岸田さん)は高校で初めてスペイン語を学んだが、その時の教科書は、上述のようなものではなく、イラストや会話が豊富に入ったものであった。

★2000年代を境に、専攻の初級文法書としては宮城著の教科書は新しい教科書に取って代わられたが、今でも宮城の教科書が使われている大学もあるようである。

★参加者のうちスペイン人(Jose Caminoさん)は、スペインで日本語を最初に学んだ際『みんなの日本語』を使用していたが、文法中心の教科書だった。

★参加者は全員学生時代にスペイン語専攻である一方、教えているクラスは非専攻である場合が多い。このため、単純な比較はできないが、過去の文法教科書は「文学作品などの文章の読解」と基本的な文の産出をめざしていたが、近年は、基本的な会話ができることをめざした初級文法にシフトしているということが、参加者の持参した教科書や発言からうかがわれた。

2. 外国語教授法研究と第2言語習得研究(スペイン語ではなく全般的に)を概観しながら、参加者がざっくばらんに発言。ワークショップでは配付資料がなかったので、以下に内容を示す。

外国語を教えるという行為は太古の昔から存在し、そこには個人の工夫もしくは継承されてきた「おしえかた」が存在していた。しかし、何らかの理論的、科学的根拠に基づいた研究は、20世紀中葉から盛んになっていった。一方、第2言語習得(SLA)研究は、効果的に外国語を教えるために、人が実際にどのように外国語を習得(使えるようになっていく)するか、あるいはしていない(使えるようになれない)のかを研究する分野として、特に1960年代後半以降進展していった。これらの研究に携わる人々は通常「教える」立場であるため、研究の目的は教育環境におけるよりよい教え方の追求ということになり、不可分の分野である。しかし、前者には、社会的な必要性として「何を教えるべきか」という視点が生じる。たとえば、ヨーロッパ評議会が作成した「しきいレベル(Nivel umbral)」や「ヨーロッパ共通参照枠」は、ヨーロッパに生活する外国人にとって必要と思われるスキルが提示されている。一方、後者には、習得(ないし学習)はどのように生じるか、習得(学習)を阻害する要因は何かというメカニズムの解明をめざす視点が含まれる。(よって、ワークショップでは言及しなかったが、教育によらない自然習得の調査研究もSLA研

究の重要な対象である。)

外国語教授法研究においては、1960年頃「オーディオリンガル・メソッド」が科学的な教授法として外国語教育に新風を巻き起こした。これは構造言語学に基づく対照分析仮説と親和性があるが、その後チョムスキーの言語能力についての理論の影響により時代遅れとなっていった。が、その後、「メソッド」開発が盛んになり、様々なメソッドが開発され、注目を集めたものもでてきた。(なお、この話の中で出た「サイレントウェイ」は、私もよく知らなかったのだが、静かにするのは教師の方であり、教師があれこれ説明・指導するのではなく、リラックスした雰囲気の中で生徒らに言葉の産出を促す方法である。) 1980年頃からは、「メソッド」(具体的な教え方が様式化されたもの)に代わって、それらの元になるような概念である「アプローチ」という用語が使用されるようになっていった。最も影響力のあったのが、「コミュニケーション・アプローチ」である。

第2言語習得研究の草分けは、学習者の母語と目標言語を対照させ、両者が似ていれば「転移」によって容易に学習され、違っていれば「干渉」のため学習が困難であるという「対照分析仮説」である。が、1960年代後半に、学習者の誤りの分析から仮説への反証が出たことをきっかけに(Corderの「エラー分析」)、実証研究が盛んになっていった。そして、学習者の使用する目標言語のあり方は「中間言語」(Selinker)と呼ばれるようになった。以後、SLA研究は、一方ではチョムスキー理論の影響を受けた言語理解のメカニズムの仮説モデルの構築、また他方では、学習者を被験者とした実験に基づく実証研究によって進展していった。前者の代表としてKrashenの「インプット仮説」、後者の代表としてM. Longの「インタラクティブ仮説」(実証研究に基づいて出された「仮説」)を挙げる。中間言語研究の主流は1980年代までは文法項目の習得(発話や筆記における正しい産出)であった。しかし、1990年前後からは、謝罪、断りなどの言語行為を相手とのやりとりの中でどのようなディスコース構築で実現するかについての「中間言語語用論」研究に主要な関心が移っていった。なお、SLA研究に含みうるのは「学習者要因」と呼ばれる、モチベーション、不安などの心理的側面である。1990年代に、R. Ellisにより、SLA研究(それに基づく教授法研究を含む)が体系的にまとめられた。

研究分野や理論的基盤は上記にとどまらない。全体として、これらの研究分野の主要な関心の背後には、他の学問分野の影響があり、1960年代までは言語学、1990年くらいまでは(認知)心理学、そして90年代以降は社会学との関連を見ることにより、研究史を概観することができよう。

概略的に、この2つの研究の流れを表で示す。

外国語教授法研究	第2言語習得研究
<p>1960年代 オーディオリンガル・メソッド</p> <p>1970 ヨーロッパ評議会「しきいレベル」</p> <p>1970年代 各種「メソッド」が流行</p> <p>1970年代 「概念機能シラバス」(⇔文法シラバス)</p> <p>1980年代 「アプローチ」という概念 コミュニカティブ・アプローチ ナチュラル・アプローチ</p> <p>1990年代 タスク・アプローチ</p> <p>2001 ヨーロッパ評議会「ヨーロッパ共通参照枠(CEFR)」</p> <p>2000年代 社会文化的アプローチ TBLT, CLIL</p>	<p>1960年代前半 対照分析仮説</p> <p>1967 エラー分析 (Corder)</p> <p>1972 「中間言語」(Selinker)</p> <p>1970年代 生成文法・認知心理学(情報処理モデル)を志向した習得モデル研究および文法事項の習得順についての実証研究</p> <p>1970年代後半～80年代前半 Krashenの5つの仮説が流行 (①「習得・学習」仮説、②インプット仮説、③自然な習得順、④モニター仮説、⑤情意フィルター仮説)</p> <p>1981 「インタラクション(相互行為)仮説」M. Long</p> <p>1985 Swain「アウトプット仮説」</p> <p>1980年代後半 「学習者の不安」研究</p> <p>1990年ごろ～ 中間言語語用論研究 学習ストラテジー研究</p> <p>1990年代～ 教室談話の研究(社会構築主義的立場から)</p> <p>R. Ellis 第2言語習得研究の体系化</p>

★ワークショップ内の参加者(長瀬さん)のコメントにあったように、ある時期にある「教授法」が特に話題になっても、それは特に新しいものではなく、同様の「おしえかた」は既に実施されている。「教授法研究」の主流(流行)はそのディシプリンの文脈ないし歴史の中で変遷するが、現場では教え方についての様々な試みやローカルな伝統がある(「おしえかた」)。よって、学問的裏付けの有無はともかく、ある方法が効果を上げるかどうかという視点においては、学術的な色彩を帯びた「教授法研究」と現場教師の教育という行為に伴う「おしえかた」の工夫(それは現場の状況に即したものであろう)との間で、優

劣のようなものはないと考える方がよいと思われる。

★また、ある「教授法」についての研究や紹介は、研究者や紹介者がその教授法を唯一正しいものとして奉じているということではないが、研究された内容から有益な示唆を得られることにも留意すべきであろう（村上さんのコメントより）。

ワークショップでは、今回のタイトルに則した話を優先した。しかしながら、これらの研究分野の背景にあるいろいろな学問分野の影響を知ることは、「授業がうまくいけばそれでよい」という研究態度よりも踏み込んだ、非常に興味深い視点を複数得られるので、是非おすすめしたい。例えば、ソシュールによる「言語学」研究の確立とそれに続く構造言語学が背を向けた発話（パロール）の意味の研究（「語用論」は当初言語哲学者の「言語行為論」が発端）、社会学者によるコミュニケーション研究（相互作用論、会話分析、社会構築主義等）、コミュニティと言語・意味の関係を考察する文化人類学（言語人類学）の研究（チョムスキーの「言語能力」へのアンチテーゼとして「コミュニケーション能力」を唱えたのは人類学者のデル・ハイムズ）、等である。また、外国語教育は教育の一部であるとの味方から、教育文化学、教育心理学に関心を広げるのも有意義だと考える。（もちろん、あれもこれも学ぶのは無理があるので、関心の赴くままでよいと思う。）

今回のワークショップでは、スペイン語教育そのものの研究史には触れなかったが、スペインでは1980年代後半から本格的な研究が活発になっていったことを指摘したい。

一方、日本におけるスペイン語教授法研究については、2010年までに発表された論考をほぼ網羅した文献リスト「スペイン語教育・学習関連文献（2010年まで）」（2013年6月作成）をTADESKAのホームページにアップロードするので、参照していただきたい。

研究史および現実の社会的状況から見て議論になりやすいこと

活発な議論を通じてよりよい実践への感覚を高めていけることを望んでいます。以下の4つを挙げますが、他にもいろいろあると思われます。

- 外国語習得には大量のインプットが必要と言われるが、そのインプットを限られた授業を通してどのように実現できるか。
- 母語習得と外国語習得のメカニズムは根本的に同じか、異なるか。共通点と相違点はそれぞれ何か。
- 教授法研究で影響力を持った「メソッド」（狭義の「教授法」）と、個々の教師が個々の現場や場面で教える方法である「おしえかた」（この平仮名の使用は今年度のTADESKAのテーマに、教授法研究に縛られない個々の教師の教育活動の実現の仕方を含めたかったことによる）とはどういう関係があるか。
- グローバリゼーション、自動翻訳の進化と普及などの時代においても、過去の研究成果は有効であるか。

以上